

〔翻 訳〕

ジョン・バトラー・イエイツ

〔著〕

『アイルランドとアメリカからのエッセイ』

日 下 隆 平*
藤 居 亜矢子** 訳

G. F. ワッツと芸術の手法¹⁾

かねてから、私は画家が書いた自叙伝を待ち望んできた。それも、有名画家による、幼年期に始まるものである。古今、聖人^{つみびと}や罪人でさえ必要以上に詳しい回顧録を残してきた。また、多くの有名作家に至っては言うまでもない。

今までのところ、私たちは画家の告白というものにお目にかかったことがない。あの偉大なミケランジェロをはじめ偉大な画家たちが、本当のところ、学校で他の学生より学習能力が低く、教師の教えを理解できなかったなどと明かしたなら、不名誉なことこの上ないであろう。それ故、自伝は告白と称されるのである。

* 本学国際教養学部

** 本学兼任講師

キーワード：ジョン・イエイツ、肖像画家、ヴィクトリア朝、アイルランド、ラファエル前派

普通の子供の観察力と較べて比較にならぬほど素晴らしい理解力と独創性を持っているのに、こと学校の勉強となると、教えるにも困難をきわめるといふ少年の例をよく聞くことがある。音楽が演奏されるところで、音楽家の卵たちに古典語文法や算数を教えようとするのは、暴挙というばかりか、不可能に近いことに思えるだろう。だが、画家の目を持つ少年に文法やその類を教えようとするたびに、まさに同じことが行われている。時の流れと経験を経て、ようやく学んだのは、音楽の感性に敬意を払い配慮するということであった。その感性を認め、理解するような環境になったのである。素晴らしい音感を持つ少年は、音楽に夢中になり、魂を奪われ、教育を受け、大切に扱われる。そんな少年には住みやすい世の中になった。だが、素晴らしい観察力を持つ少年の場合はどうだろう。素晴らしい聴覚を持つ少年が心を奪われるのは、音楽が実際に演奏されている時だけなのに対して、優れた観察力がある少年の場合は、暗闇にいる時を除けば、色、形、光、そして影にいつも取り囲まれているので、周囲の誘惑からいかなる時も逃れることができない。少年は、教室内のあらゆる物の形状と外観について、また、机やテーブルに対する光の反射の仕方についても知っている。学友の中にいて、みんなの横顔や正面の顔、目の色、体つきについてもよく知っている。この少年が生を授かった目的とは、観察対象から絶え間ない知的陶醉を得ることであるから、形状や色彩のことなら微に入り細を穿つほど詳しい。その少年にとって、目は、知恵の入り口なのである。年端のいかぬ子だと、その知恵が夥しく一遍に入り込もうとするのだ。その結果、少年はその扉を開くことに、時間の大半を奪われてしまうのである。

画家としての歩みには——条件さえ整えば、絵と彫刻を創る神聖な職に就くために備えるには——様々な段階がある。まず何よりも観察である。その後、少年が対象から推測を導く時期が来る。少年にとって、顔とは、

精神の指標となるものである。偉大な芸術と少年との関係を例えて言うなら、その少年は、ラーヴァーター²⁾のことを知らない人相学者か頭蓋学者か骨相学者のような存在となるだろう。その後、科学的探究に夢中になるが、最後には幸福な時間が訪れ、知的欲求からなる輝かしい世界が、突如として、目の前に現れるだろう。

私の友人に或る老画家がいる。彼はかつてスコットランド北部の美術学校で学んでいた頃の体験を語ってくれたことがある。ある朝のこと、教師がいつもと違う、思い切った方式を授業に取り入れたことがあった。結果的にそれが良かったのか、思い浮かぶものは普段と変わらないものの、生徒はいつもより思索に没頭できたという。例えば、友人は、物の形状や色彩を熱心に観察することにおいては、いつもと同じであった。ただ、前述のように、一心不乱に、対象に気持を集中させることでは、常をはるかに上まわっていた。その日は早春の朝であった。日光は、その年になって初めて部屋に差し込み、足元のほこりだらけの床に黄色の四角形を作っていた。そんなことが起きるのは、一年中でも、特定の時期だけだった。時が過ぎれば、木々に多くの葉が繁り、冬になると太陽はほとんど空に出ない。友人は不幸な身の上で、些細なことでも心配する性分だった。だが、その朝あった事と教師の試みとが、不意に現れた足元の日光と結びつき、彼を新しい少年に変えたのだった。そして、彼は心を揺り動かす、四角形の輝きを眺めた。いわば、神秘的な啓示を受けたのだ。後になって、学校を卒業すると、友人は風景画家となった。

ワッツのような人物の場合、願う世界は、違った方法で出現したのだろう。ワッツは、イングランドがこれまでに生んだ中で最も偉大な肖像画家であった。あまり肖像画家とは言えないブレイクを別にすれば、ワッツは、格調高く、壮大な主題に取り組んだ画家であった。数年前のことだが、喜ばしいことに、思いがけず私の仕事場で彼と会った。私の受けた印象であ

るが、記憶に残るのは、彼の端整な顔立ちと、人を寄せつけない孤高の雰囲気である。声にも厳格さを感じた。私の絵を一言も発することなく見つめていたので堪り兼ねて、とうとう意見を求めてしまった。すると、明瞭かつ率直で、的を射た意見が返ってきた。それでも、ワッツに言わなかったことがある。これまで一度も会ったことはなかったが、何年もの間、私はワッツの勤勉な弟子であったこと。そして、絵を描くことの真の意味と、私を含めた画家たちがこの職に取り掛かる気になった理由を彼から初めて学んだことを。

生涯、ワッツは隠遁者であり、世捨て人であった。もし、彼が世俗での暮らしを愛し、楽しんでいたら、ホガース³⁾がそうしたように、俗世間で暮らし、その様子を描いたことだろう。だが、ワッツは、自分の仲間を愛し、仲間の幸福を生み出すものであれば、根気よくどんなものでも求めた。もっとはっきり言えば、彼が絵を描いたのは仲間を愛するためであった、と言える。そのような人間だったからこそ、彼の願いに、怒り、哀れみ、精神的賛美、愛などの感情が喚起された結果、願う世界がある状況の下で突然現われたのだろう。その瞬間、ワッツは、火の点る想像力の赴くままに、他人の生を次々と送ることを空想したのである。というのは、目が求めてきたものを見つけたために、彼の願う世界は、寸分違わぬ瞬間に、創造の世界となったのだ。願いの目とは、創造の目である。言うなれば、世界自体は、美しくも、醜くもない。ただ形のない広大な空間であるが、そこから、我々は、願望に応じて、新しい世界を創るのだ。狂人と詩人は、同じ風景を見ていても、一方は醜さを、他方は美を見つける。ワッツが見たのは、苦しむ人びとの世界、若しくは、真剣な目的を持ち共に努力する人々の世界であった。

ワッツについて語るなら、彼の肖像画から始めよう。その肖像画の素晴らしさについては議論の余地がない。肖像画以外の絵に共感を抱かぬ者が

いたとしても、肖像画を否定する者はいない。近頃、肖像画の出来映えは、主として友情によるのではないか、と思うようになった。いずれにせよ、確かなのは、最高の肖像画が描かれるのは、モデルと画家が友人同然の関係にある場合である。ワッツの場合、私の主張を擁護するのは、彼はたいがいモデルになってもらいたい人物しか描かなかった、ということである。

肖像画とは、モデルに対する解釈によるところが大きい。色を付け、顔にうまく立体感を与えていくこと自体は、熟練家にとっては、それほど難しいことではない。この後で、人々が見るのは、当然のことながら、画家の目を通じて描かれた、独特の曲線と陰翳、目立った眉や目の形となる。ここに本当の難しさがある。画家にとって、真の喜びと至上の成功は解釈にあるのだ。

ワッツの初期の肖像画では、ほとんどこの解釈は試みられていない。確かに、どの時期においても、彼の絵は、独特の雰囲気が生み出す魅力に溢れているだけでなく、明白かつ、装飾的なねらいをもっている。だが、この初期の肖像画は、後期のものほど注目されていない。その理由は、解釈が欠けているからだ。

世の人々は、ワッツの肖像画といえば、女性を描いたものよりも、男性のものを好むそうだ。だが、私はこれに同意できない。どちらもそれぞれに完璧な域に達している。ワッツは若い貴婦人をよく描いている。その女性は、流行の先端を行く夜会服、きつと、最も現代的で、斬新な色の組み合わせのものに身を包んでいる。ワッツの肖像画では、女性がそんな風に描かれるのだ。そして、彼の芸術の絶妙な錬金術によって、彼女はとても魅力的に描かれ、ベネチア風の美人が、歴史書一枚から、こちらをじっと見つめているように思える。

実際、彼の肖像画には、男女どちらを描いても、ある種の淡い宗教的な輝きが一面に漂っている。そのため、オランダ風の写実主義によって描か

れていても人物が記憶やロマンスの霧の中から現れるように見える。

ワッツの想像力豊かな絵について話す前に、少し、芸術と芸術家のあらゆる効用について考えてみたい。

モラリストは、「大切なのは、道德だ。それがなければ、社会がまとまることなどない」と言う。

商人は、「商売こそ大切だ。それがなければ、富は存在せず人生に生きる価値などない」と言う。

宗教の師は、「宗教ほど大切なものはない。それがなければ、来世のこと、来たるべき審判のことを忘れてしまうだろう」と言う。

科学者は「大切なのは、真理だ。真理はあらゆるものの根本だ」と言う。

芸術家が、これらの人たちの集まりに居合わせて、抗弁できることが何かあるだろうか。私たちは、彼らを前にして、昔から畏敬の念を抱くあまり、脱帽し黙すのみである。

そもそも、芸術家がしてきたこととは、何だろうか。

芸術家の仕事は自らを喜ばせるためであって、他人を喜ばせようとする事など、とんでもない邪道、つまり、正しくない行為と考えているのだ。善と同様に悪も讃えるのである。ある時期、ワッツは、霊的な問題に没頭していたかと思えば、同じほど熱心に、感覚的な問題にも取り掛かった。罪の意識やためらいなど微塵も感じることなく、いかなる情熱、衝動であろうと、善悪関係なく、代わる代わる実物以上に描いた。不幸な人間はより不幸に、悪人はより邪悪に描くのである。教訓を授けることもなく、教義を説くこともない。だが、時にワッツと共にいると、高潔な人物はより高潔になるのである。

あらゆる社会で、ワッツのような人を見つけることができる。罪人の中にあって、彼の赦免が救いの光となる聴罪司祭のような存在である。だからこそ、罪を洗いざらい悔い改めた後も、依然として罪を犯し続けるので

ある。ワッツは善人の顔を見ると笑いを禁じえない。その顔に、自己満足、儀礼、不誠実、打算、臆病、不熱心、というやましさを見出すからだ。事実、この世の善人より、罪人に対してもっと敬意を示すことがある。その上、英雄は、王族の思いつきから榮譽を授けられてきたが、そんなことも画家や詩人の助けを借りて行ったのではなかったか。

この芸術家という不可思議な存在には、怪しげな素性がつきまとう。その性質からして、彼らは何の役に立つのだろうか。芸術家と有用であることとは対極にある存在に思われる。

なぜ道徳、商売、科学、宗教などが存在するのだろうか。この問いには簡単に答えられる。だが、画家、彫刻家、詩人、そして音楽家たちの存在理由は、もうひとつの謎である。それはまるで、無限の宇宙を巡っている恒星が、無数に存在するのはなぜか、という問いのようなものだ。

この尊い師たちにあって、芸術家など、まるで天使たちに囲まれた、墮落天使のような存在に過ぎない。これらの師たちは、地位も力もあるにもかかわらず、みなこぞって、芸術家の機嫌をとり、何とか自分たちの仲間にしようとする。まるで我が儘な子供のような芸術家をひどい境遇から救い出すと、いつまでも自分たちのところで暮らすように仕向けるかのようなものである。これは、ひとつには、師たちにあって、芸術家の本性の激しさがために、そこから生まれた作品が彼らに愛されるからだ。また、ひとつには、人が一緒に集まるところでは、芸術家、すなわち、詩人、画家、音楽家、彫刻家は、良かれ悪しかれ、この世で最も強大な力を行使する、ということ、彼らは認めているからである。詩人の力を借りることがない神学者がどこにいるだろう。同じように、そんなモラリストがどこにいるだろうか。現在、この展覧会にいて、私はこんなふうに思えてくるのである。神学者、モラリスト、それどころか形而上学者は一人残らず、私たちの最大の芸術家の一人と見事で効果的な取り決めに巧妙にした、と考えている

のではないかと。

『愛と死』『時間、死、審判』『イヴの誘惑』『イヴの悔悟』『カインの悔悟』などの画題をみれば、おそらく、スコットランドにおいて、長老派の聖職者たちが、ワッツの画廊に詰めかけた理由を説明するものとなるだろう。また、ここダブリンで、この活気溢れる都市ができて以来初めて開催されたすばらしい展覧会で、非難と悪意ある批判の声が皆無であったことをも説明するものとなるだろう。

さて、これらの絵が教えてくれるものとは何なのだろうか。ワッツ氏は何のとりこになっていたのだろうか。もしくは、彼は、モラリストか形而上学者なのか。それとも、単に優れた才能を持ち、自らの救済を芸術で成し遂げただけなのだろうか。

イヴに関するふたつの作品を例にとってみよう。このコレクション全ての中で、この二枚の絵ほど詩的な作品は他にない。

最初の『誘惑』⁴⁾において何がわかるだろう。イヴは美しく妖しい魅力⁵⁾に満ちている。我々はこの妖しい魅力を、最も激しい挑発の瞬間に感じる。イヴは身体を丸め、狡猾な蛇のささやきに耳を傾けながら、喜びで震えているように見える。イヴは澁刺とし、輝くような若さと生命力でしなやかな体つきを見せながら、誘惑の声になんと官能的に身をまかせていることだろう。これが女性の本質であり、美しく妖しい魅力である。まだ、善悪や疑惑をまったく知らず、死を思うことなど毛頭ない。周りには夏の花々と豊かな香りが存在する。彼女の足下には、ヒョウ⁶⁾が背を丸めているが、そのヒョウは、女性という豊穡なる存在と微かに共鳴するか、反響している。

これを道徳的教訓と呼ぶのは、全くこじつけに過ぎない。古代ギリシアの詩人ピンダロスがぶどう酒杯を賛えたように、ワッツは甘美な誘惑を讃美している。ワッツは、これら二枚の絵画で裸体美と肉体美を讃美してい

る。レイトン⁷⁾ならば、イヴを塑像のように高貴な女性に描いただろうが、現実離れした装飾に満ちた世界から描いたために、イヴはリアリティに乏しいものとなっただろう。だが、ワッツのイヴは、大きな半神半人像であるにもかかわらず、他の肖像画、例えば、J・S・ミルやリボン伯爵を描いたものと同じくらいリアリティがある。真に迫るあまり、イヴの生气に満ちた身体に触れることができるようであり、喜びの声やささやきが聞こえてくるかのように感じる。もう一方のイヴ⁸⁾は、非常に写實的に描かれているため、嘆き悲しむのが聞こえるようだ。

次に、「パオロとフランチエスカの物語」⁹⁾を描いた絵を例に取ってみる。それは、画廊のすべての絵の中で、もっとも完成度の高いものである。ことによると、その絵を愛した友人たちが、芸術家に不可欠な励ましを彼に与えたことが理由かもしれない。素晴らしく想像的である上に、引き込まれるような装飾のある作品である。罪を犯した気の毒な恋人たちは、人間らしさを失い、薄っぺらな姿となって、枯葉や軽い羽毛のように、風に乗って漂う。だが、いかなる道徳的教訓を説くものではない。この絵が新たに説明しているのは、真の恋人たちの悲しい運命である。恋人たちに与えられる罰を優しくも、美しく描いている。この絵に対する、ジョン・ノックス¹⁰⁾の意見を聞いてみたいものだ。この画家には、ある種の近づき難さ、ある種の厳しさがある。ワッツとノックスという、この二人の優れた人物が出会えば、興味深いことになっただろう。

しかし、我々は難局に立つと、多くの助言者の意見に惑わされる上に、いかなる場合でもその助言を求めてしまう厄介な性癖がある。そのため、たとえ、男女の愛にさへも、道徳を求めてしまうに違いない。

そこで——芸術の真の評価には必ずしも必要なことではないが——いわば、私の全責任において、不本意ながら、想像力豊かな芸術から道徳的な教えを取り除いてみようと思う。

もし、道徳が、遵守せねば罰せられる行動律となっていたにせよ、芸術は、その反対に、あらん限りの力と声で、「誘惑を求めよ。誘惑に走って会いに行け。誘惑されるのはこの地においてだ」と言おうとしているように思える（道徳が誘惑を避けて、我々の行く手そして全世界の行く手から誘惑を阻むよう命じていても）。また、芸術は「幸福になれ。惨めになれ。賢明になれ。分別を持て」と言うのでなく、「運命と戦って生きろ、労を惜しむな。落伍者や臆病者にはなるな。恐れてはいけない」と言うのである。次のような内容もメッセージの一部となる。「ワッツが生き、そして真の芸術家が必ず住んだ場所（高い台地で、知性ある幸福という陽光の降り注ぐところ）に住みなさい。決して谷に降りてはいけない。谷間には、重苦しさ、無気力、下層の貧苦、肉欲、姦通が、霧のように漂っていて、それらは、挫折し、失望し、判断力を欠いた時、人間性を苦しめるものとなる」。

部屋の突き当りには、非常に印象的な大作『時、死、審判』¹¹⁾がある。目を引く絵であることは、芸術家にとって、よくできた絵ということになるが、私にはこれが偉大な絵とは思えない。事実、色の組み合わせや広がりや輪郭線はすばらしいが、どこにも力強い信念が存在しないからだ。

時は進むものである。それを示すように、（その絵では）時を象徴する若者は手に大鎌を持ち大股で進んでいく。その傍らに死を象徴する彼の妻が疲れ果てた表情で歩き、ゆったりとした衣服のヒダに生命の花を優しく引き寄せている。二人の上には、審判する女性がいる。これらの人物の伝える意味や意図をみると、漠然としていて、型どおりに描かれている。仮に、何らかの意味があるとすれば、この絵は、あたかも、ワッツが自分自身に、「肖像画家の技巧を用いて、美しい夕焼けを眺めることや、聖譚曲（オラトリオ）を聴くことで、かり立てられる、心地よい恐怖のようなものを描くのだ」と、述べたかのようなものである。このような絵画は、ミケラン

ジェロも言ったように、芸術とは言えない。(彫刻とは素材が命じるままに彫るものと考えた)。また、ブレイクは、絵画とは、法律家の書く書面のようなべきだ、と述べた。(絵画は明確な意図を持たなければいけないこと)。

『愛と死』(1885-7)は、さらに優れた作品で、注目をすぐに引く。他の絵の前では、我々は漫然と物思いに耽るだけだが、この絵の前になると、その絵のメッセージを理解したいと思う——絵の核心を知りたいと思うのだ。「愛」は裸体の人物によって表されている。その人物はのけ反り、後ろに倒れようとしている。そして、「死」は巨体の持ち主であるが、ゆったりとした服を着、頭巾をかぶり、ぞっとするほど恐ろしい。男なのか、女なのか、その顔は隠されたままだ。その顔は画家の考えの中だけにあり、その知識を墓まで持っていく哀れな死者を除けば、「死」の顔をこれまで誰も見たことがない。

このコレクションには含まれていない有名な絵画——『希望』(1885)と題された絵画——について、話しておこう。その絵は、人々に喜びをもたらした好評を得たが、それはその絵の欠点のためであった。この作品が好まれるのは、誰も作品の意味するところを正確に言えないからである。実際に希望によって生きた人物たちなら——クロボトキン¹²⁾やウィリアム・モリス¹³⁾——その絵の曖昧さをとても不満に思うことだろう。

行動とその成果の世界では、規則は柔軟で、思想もほどほどにすることがあることから、絵画においても柔和で曖昧な筆致をもつ画家がイングラントでは好まれる。だが、それとは反対に、芸術というものは曖昧さを排除するものである。白黒がはっきりしている。つまり、想像を突き詰めて追求しなければ、絵画は活力を欠いてしまい、何の効力も発揮しないものとなる。万事に言えることだが、芸術においても活力こそが人の心を和らげる力なのである¹⁴⁾。

思うに、この種の絵画は、お金に困らない有閑階級の部屋にかけられることになるのだろう——なぜなら、このような絵は、努力をせずに気ままにしていいたいと思う人たちを対象にしているからだ——彼らは、どんなに誤っていようと、過去、現在、未来の万事を、明るく、微笑みながら眺めるのである。麻薬、アヘン剤、鎮痛薬のような薬物類の代用となる芸術作品を、求められればいつでも提供できるように常備している芸術家、詩人、画家、がいるように思える——この絵については、ワッツもその一人である。ミケランジェロは、自分への怖れ、つまり、憂鬱質(メランコリー)¹⁵⁾であることを、自尊心から鎮痛薬を受け入れなかったことによるものと、考えた。ミケランジェロは、人生のあらゆる現実と正面から向き合ったのだ。

さて、ワッツの技術上の欠点をすぐに指摘しようとする方々に答えて、ひとこと言わせて戴きたい。欠点を見つけるのは簡単だ——いつも容易いことである。いや、それどころか、論理を学んでも、情熱を学ばず、理想や詩を好まぬものばかりが生きる、この目まぐるしく動く都市において、ワッツの技術上の欠点は並外れた成果なのだ。

この人たちへの返答に、私は「承認および異議」(相手方の主張事実を一応承認すると共にそれを無効にさせる新事実を主張する抗弁)¹⁶⁾を申し立てたい。

ワッツの欠点についての指摘を何もかも認めるとしても、イングランドにおける全ての画家で、『誘惑』のように、あの気高いイヴを描ける人物が果たしているだろうか。運命に屈服するとき、なんと堂々と前かがみになっていることか。何と律動感があることか。如何なる姿勢でイヴは律動していることだろう。緊張と、神の掟に背くという恍惚の中、ありとあらゆる神経と筋肉が震えているように見える。ミレー¹⁷⁾やレイトンやアルマ・タデマ¹⁸⁾のような、ワッツよりもっと偉大とされる芸術家であっても、そ

のような躍動感を描けなかったことだろう。レイノルズ¹⁹⁾やゲーンズバラ²⁰⁾やヴァン・ダイクも同様である。この中で、ワッツが成し遂げたことを実行できる技巧を持つ人物はいない。ワッツは、その技法で成功を収めたのである。

しかし、ワッツの作品がいつも成功を収めたわけではない。主題によって刺激を受け、大いに努力しなければ、不完全なうえに杜撰な作品となった。知ってのとおり、この人物は長い人生を生き抜いたが、感性が豊かで好奇心が旺盛だったためか、仕事を仕上げるのに手間暇を要した。

ここで、しばらく、ワッツその人について簡潔に述べさせていただこう。我々が知る限りでは、彼はきわだって謙虚で、慎み深い人物である。それは、ミケランジェロについては言うに及ばず、偉大な思想のために仕事をした人間すべてに言えることである。『最後の審判』が完成したとき、イタリア全土に賞賛の嵐が起こり、諸侯や枢機卿や詩人は互いにこぞって敬意を表した。ミケランジェロは、彼らを相手にせず、一蹴した。「私が敬虔な信者であれば、次のような言葉だけで十分でしょう」と述べ、客の一人に、「私は、神から授かった技のおかげで仕事をし、寿命を延ばしてきた、一介の貧乏人に過ぎません」と答えた。芸術家や詩人が気取って偉そうにするのは、バイロン卿もそうだが、深遠な思想をもたずに仕事をしているからである。そんな態度をとるのは、彼が率直さや誠意に敬うべきものを認めていないばかりか、自分の運命や感覚より素晴らしいものを見いだしていないからである。芸術のための芸術とは、多くの詩人がそうであるように、人生を煩わしく思う人々のためのものである。また、多くの詩人がそうであるように、思想を重んじない人々のためのものである。偉大な芸術家もまた、我々自身に似た人間なのだ。彼ら自身も普通の人間であり、その人格から芸術が生み出されるのである。

では次に、慎みながらも、衝撃的な意見を述べさせていただきたい。宗

教画家として、ワッツは失敗したと思う。それというのも、彼は失敗するべくして失敗したのだ。

精神界は、15・16世紀の人々と同じように、我々にとっても、大切なものである。だが、我々の時代では、表に集約されたデータ、思考の順序、科学的推測、慎重に計画された実験などを用いてその深奥を追求しようとする。例えば、ミケランジェロは、あらゆる物は、彫刻で表現される、と述べたが、事物は、決して絵や塑像だけでは表現（再現）できるものではない。

言うなれば、自然の女神は、同じものを決して造らないということであろうか。自然の女神は、自らの宗教画家を生み出してきたが、その全盛期は終わった。ワッツは、不可能なことに挑もうとしていた。

遠い昔、人々は、天使、大天使、聖人、神々、女神、預言者、巫女、地下世界の悪魔、天使を含む超自然的な神性、また、ワッツが『愛と人生』という絵に描いたような天使の存在を含む、あらゆる超自然的存在を、信じていた。しかも、矛盾することなく、実に生き生きとした姿でその存在を信じていた。これらの天使や神々の姿を描いた画家は、目を凝らし作品の出来映えを見る人々の、厳しい批評にさらされながら、絵を描いた。現在では、この美しくも恐ろしい神々や天使の代わりに、嵐や雷などの自然の力を描いている。

ワッツの『愛と人生』（1885）という絵を取り上げてみよう。その絵は壮大な主題を扱っている。文明世界の精神は、一様に、その解決の道を探ってきた。しかし、この絵で、そのタイトルは決して表現されていない。「人生」は、手探りで躡きながら岩の階段を上る、物乞いのように弱々しい人物として表現されている。だが、これだけでは、「人生」の不幸な側面しか表現していない。ミルトン²¹⁾が見たなら、軽蔑したことだろう。ワッツは、自分が描いたイヴを思い出すべきであった。「愛」は、力強い天使

として描かれている。厳密に言えば、「愛」が力強い天使ではないからこそ、あらゆる悩みの種が我々に降りかかるのである。『希望』（1885）という絵が、貴婦人の私室に置かれるとすれば、両手の指を組み天に向かって祈るだけで人生が救われる、と思うような人々の小部屋に掛けられるべきであろう。

『イヴの悔恨』（1865-97）では、青雲の間から、冷たい光が突然現れ、背中と肩を輝かせる。ここに、昔のベネチアにあるような、青、黄、白の調和をみる。そのため、微妙にはあるが、動悸を打つ、むき出しの肌の暖かさをいやが上にも感じるのだ。だが、幸いにも、ワッツが描いているのはそれだけではない。雲の切れ目から光る雷によって、ワッツは、罪を犯した者にも救いが存在することを象徴している。だが、誰が関心を持つのだろうか。この象徴を、ミケランジェロの絵にみる象徴と比較してみよう。ミケランジェロの絵では、創られたばかりで、半ば目覚めたアダムは華麗なけだるさで腕を上げ、神の知識を受け止めようと神の人差し指に触れようとしている。この場合、私は『愛と死』を含めるつもりはない。その絵は、私には、いかなる意味においても、宗教画とは言えないからである。この絵には、何の教義や神秘的教義も暗示されていないし、何の感情も受け取れない。芸術家は、努力によって、とてつもない効果をあげて、我々の前に、今も、我々と常にある、確かな事実を示してきた。その絵は偉大であるものの、宗教的な絵ではない。

ワッツは、賞賛する言葉もないほど素晴らしい肖像画家である。主題に鑑賞者の興味を湧かせる点でも、あらゆる画家の中で群を抜いている。大部分の絵の前に人が立つと「肖像画とはなんと退屈なものだろう。なぜ、こんなものが展示されているのだろう」と言うだろう。もしくは、「とても上手な画家だが、描かれている人物は少しも美しくない」と言うかもしれない。ところが、ワッツの絵を前にすると、我々はその顔に関心を持つ。

そして、好悪の感情を抱くか、好奇心をかき立てられるのである。

ワッツの職人芸とも言うべき肖像画家としての腕前は、厳しい批評に晒されながら創作活動をしてきたからこそ、完成の域に達したのである。肖像画なら誰でも理解できる。愚かものでも自分が描かれていると、その絵に関心を抱くものだ。

ワッツが空想的な作品を生み出すのは、慇懃無礼な環境で描かれた時である。ワッツは、この時代で最も著名で知的な人々に囲まれて生きたが、その中で孤高を持したのは、不思議な逆説といわざるをえない。ワッツが道を誤っても、教えてくれる人物はいない。同じように、正しい道を歩んでも反応はない。芸術家に関心があっても、その作品には興味がない。この高尚な心を持つ世捨て人は、自らの絵で、世に偉大な思想を与えようと努めたが、教養ある俗物たちに感銘を与えただけだった。そんな人々は、人物に興味を抱いても、その考えや絵には興味がない。私の友人がグローヴナー・ギャラリーの招待展示の内覧（一般公開に先立つ）に招かれた時のことである。彼はワッツが貴婦人に「みんな、私のビロード製のコートには興味を持ちますが、絵のことは誰も尋ねてこない」と話しているのを漏れ聞いた。

昔のイタリアはこうではなかった。せっかちなユリウス教皇の傲慢な命令で、ミケランジェロは、システイナ礼拝堂²²⁾の天井画半分を披露したことがあった。その時、彼はそれぞれが芸術に対し情熱を持つ国民の審判を甘んじて受けなければならなかった——彼らがどんなに暴力をふるう迷信深く、無知な者で、また軍人や殺人犯であろうとも——。

「イタリアが最高の芸術を生み出したのは、イタリア人が平凡であることを嫌うからだ」と、スペイン人の画家は、ミケランジェロに述べた。我々は、陶工が手でこねる土のようなものである。魔王のように孤高な存在であるふりをして、それは所詮無理なことなのである。芸術家とは、みず

からが受け取るものを創り出すだけである。共感を求め、仲間を欲するのは、飢えや渇きと同じほど本能によるものなのである。真の芸術家にとって、厳しい批評は、母の愛のように励みとなるのだ。ワッツは、厳しい批評に欠けたため、作品と思想の両面で精彩を欠いてしまった。

ひとつだけ言えるとすれば、ワッツがダブリンで生きていたなら、人生はもっと不運なものになっていただろう、ということである。表面上は礼儀正しく丁重でも、関心を持たれなければ、優れた作品とはならない。かといって、否定的な批評ばかりではだめになってしまうことになる。

かつて、或る小さいが強い国家が存在した。今の時代には、そのような国は多くあり、関心を持たれることもなくなった。その国に、ひとりの詩人が誕生したことから、その国の人々は彼を古今に通じる詩人にしたのだ。彼らは、その詩人を選ぶと、知っている限りのことを教えた。人々には教えるべき優れた遺産があったのだ。そして、人々の意を受けて、その詩人が偉大な劇を創り出す時、彼はいつも人々と共にあった。彼は、人々に与えられたものを十倍にして返してくれたのである。

イングランドがシェイクスピアの国となったのは、このときのことである。

詩人はいつも我々の中にいる。とはいえ、彼を見つけだそうとするのは、まさに至難のわざである。干草の束のなかで縫い針を探すようなもの、という諺にもあるように、探しても見つけられない存在なのだ。

だが、確かなことがひとつある。郷土を愛さぬ論法家には詩人を見つけてはできない、ということだ。彼らは郷土の荒廃をそのままにしておいて、それを静寂、いや文化とさえ言い換えた。この種の批評家たちは、自分たち以外の存在を認めようとしないのだろう。いや、そうではない。ひとつだけ、彼らが自分以外に敬服するものがある。それは、「達成された事実」（「既成事実」）、すなわち、世俗的出世である。かりに、ワッツが

ダブリンで生まれていたなら、インドの文官を目指して勉強し、おそらく、その試験にも合格しその道を進んだことだろう。

* 以上は、ダブリンのハイバーニア・アカデミーで、1907年の春に行われた講演報告である。

この講演は「芸術の原理」(“The Rationale of Art”)と題して、1907年 *Shanachie* (113-26) に掲載された。

原題: “Watts and the Method of Art” (1907)

利用したテキストは以下のものである。

Yeats, John Butler. *Essays: Irish and American*. Dublin and London: The Talbot Press Ltd., 1918.

注

- 1) George Frederick Watts (1817-1904) は、ヴィクトリア朝を代表する画家、彫刻家。特に、肖像画は高い評価を受け、チャールズ・ディケンズ、マシュー・アーノルド等の文学者から妻のエレン・テリーまで多くの人物を描いている。この講演はダブリンで「ワッツ展」開催に際して行われたもので、ワッツの主要作品の解説と思想に関するジョン・イエイツの深い理解が窺われ興味深い。なお、文中からジョンが法曹職を捨て、画家の道を選んだ際にもワッツの影響があったことがわかる。
- 2) Johann Kasper Lavater (1741-1801): スイスの骨相学者・神学者・詩人。人相学を科学に発展させようとした。
- 3) William Hogarth (1697-1764): 18世紀を代表するイギリスの版画家、画家。風刺を用いて、都市風俗を扱う。『ビール街』と『ジン横丁』などがある。
- 4) イヴに関する絵には、『イヴの誘惑』『誘惑されるイヴ』『イヴの悔悟』があるが、文章中には、絵の構図からして、『誘惑されるイヴ』を指すものと考えられる。
- 5) ‘animalism’ の訳として、‘femme fatale’ の意味とした。(Hamilton, Richard Paul. *This Thing of Darkness: Perspectives on Evil and Human Wickedness*.)

Amsterdam, 2004.)

- 6) ヒョウには悪のアルージュンがある。
- 7) Frederic Leighton, 1st Baron Leighton (1830-96): 聖書, 歴史, 古典的題材から多くの作品を描いた。
- 8) 『イヴの誘惑』のこと。
- 9) パオロとフランチェスカの物語は, ダンテの『地獄編』中の逸話。ロマン派の芸術に影響を与えた悲恋の物語である。夫の弟と相思相愛となるが, 二人の仲を知った夫に二人は殺される。二人の魂は地獄の風の中を彷徨う。
- 10) John Knox (1510-72): スコットランドの牧師。スコットランド宗教改革の指導者で長老派教会を創立した。
- 11) 絵の構図は, 時間を象徴する若者と死を象徴する青白い女性が手を携えて歩む。ふたりの上には審判を下す女性がいる。
- 12) Peter Kuropotopkin (1842-1921): ロシアの革命家・政治思想家。アナーキストとして知られる。
- 13) William Morris (1834-86): 詩人, 工芸家, 社会主義者として知られる。産業革命後のイギリス社会を批判。差別も抑圧もなく, 万人が芸術的な活動の中に悦びを見出す社会を夢見た。
- 14) 『希望』はイングランドでは好まれるが, 想像力の点で十分な作品となっていないことを述べる。
- 15) 黒胆汁質。ヒポクラテスの体液説によって分類した4気質のひとつ。芸術創造に優れる。
- 16) confession and avoidance (原文)
- 17) John Everett Millais (1829-1896): ラファエル前派を代表する画家。歴史的・文学的主題を明るい色調と細密な手法で数多く手がける。『オフィーリア』はよく知られている。
- 18) Sir Lawrence Alma-Tadema (1836-1912): ラファエル前派の画家。古代ローマを復元した絵画で評判を博した。
- 19) Sir Joshua Reynolds (1723-1792): 18世紀ロココ期のイギリスを代表する肖像画家。高貴な肖像画を数多く手がけた。英国絵画史上, 最も重要な画家のひとつとして認知されている。
- 20) Thomas Gaisborough (17297-1788): 風景画, 肖像画を描いた。気高い, 優

美な人物像を描いた。

- 21) John Milton (1608-74): 叙事詩 *Paradise Lost* (1667) で知られる詩人。
- 22) ミケランジェロは、システィーナ礼拝堂の天井壁画の制作をユリウス 2 世に命じられた。1508年から制作開始した、この有名な天井画は1512年に完成。神による救済を絵画化したもので、旧約聖書『創世記』の 9 場面を中心に構成される。

イングランド人が幸福なのはなぜなのか

——あるアイルランド人から見たイングランド人氣質——

長い時間をかけて、自己の在り様を究め、在るべき姿を実現しようとする時、人間には二つの型がある。それ故、その方法にも二通りある。一方は、昼夜を通して、自分のことしか頭にない者たちであり、自分の精神、心、肉体、そして一瞬かつ永遠の繁栄を大切にする人たちである。また他方では、寝食を忘れて、偉大な思想、大義、宗教に励み、情熱的愛、或いは博愛精神、戦時の憎しみにさえ夢中になる人たちがいる。二つの方法のうち、前者はイングランド人の信条であるのに対して、後者はフランス人に見ることができる。

イングランド人は幸運な国民である。もしくは、幸福だった過去においてはそう思えた。最初の幸運は、荒れた海に四方を取り巻かれ、高い崖にさえぎられた島で生活し、育った歴史をもつことである。次の幸運は、最初の幸運に由来するものであるが、彼らが強力な中央政府に一度も服従したことがない、ということだ。世界の有名な民族の中で、イングランド人ほど支配された経験がない国民はない。すべての中で、イングランド人ほど自由な国民はなく、強いて必要なのは、隣人と良好な関係を築いて暮らすことぐらいであった。確かに、隣人の中には、粗暴なノルマン貴族がいた。彼らはイングランド人を下等な民族とみなし、地主としてイングランド人を虐げた。地主と小作人の関係、民族の優劣という関係を別にすれば、イングランド人は仲間と囲まれ、自由な人間として生活していた。実際、兵士としての尊厳や名誉もなければ、忠実な服従や張り詰めた統制下に置かれることもなかった。イングランド人は粗野であっても、想像の世界は

誰にも邪魔されることなく、自分だけのものであった。しかも、彼らの用いる言語が圧制者のものと異なるため、精神的に侵略されることもなかった。彼らだけの世界、つまり自分の民族と親族だけの、離れた場所で暮らした。

ヨーロッパ大陸の他の国々、特にフランスなどは、常に他国による攻撃に晒されている。このため、平時から戦いに備え、男性は全員兵士で、戒厳令は他の全ての法律より優先された。どれだけイングランドが他国と戦い、彼らから略奪しようと、追撃や報復は不可能である。断崖の向こう側に居れば安全なのだ。どれほど他国の憎悪が大きくなり、どれほど脅かされようとも、イングランド人の暮らしは安全で、敵をものとしなかった。農民は、平和に自分の村や耕作地へ、商人は自分の店へ、貴族は自分の城へと戻る。その一方で、罪を犯しても罰せられることがなかったので、自責の念にかられることはなかった。他の国民が戦いに明け暮れ、自由を失ったのに対して、イングランド人は自由を享受し、平和の中で成長を遂げた。イングランドの貧しい人々が教わるのは、軍人の威厳でなく、彼らが社会的に劣っていることについてであった。だが、彼らは、身分が上の者に頭を常に下げても、何を考えようと構わなかった。これは今も変わらない。彼らには、自由の良い部分が残ったのだ。フロワサール¹⁾は、イングランドの農民の不潔な暮らしぶりに驚いた。しかし、もっと目を凝らして見れば、炉辺で燻る灰の下に、フランスではとっくの昔に消えてしまった自由の炎が燃えているのに、気づいただろうに。

フランス政府は軍事独裁政権であった。独裁政治が独裁政治を生み、自らを拡大しようとした。それ故、宗教、芸術、教育、といった影響力を持つものを導入すると、それらの力を用いて自由の力を押さえ込もうと企んだのである。そのため、生まれた時から、国民は、権力、権威、伝統に服従するよう訓練される。それは、熱意がある上に自発的な服従であるため、

兵士は誇りをもって指導者に従い、生徒は教師の話すことを熱心に聴き、カトリック教徒は聖職者の命令に従うことを切に願うのである。国民は、自らが奴隷状態となるのに荷担しているという点において、共犯者となっている。支配を行う方にその決定権があるので、なおさらである。国、教会、そしてアカデミーが大前提を与えるという条件はあるが、みなが自由に考え、自分自身の結論を引き出すことができる。演繹的論理は個々に考える自由がある。帰納的論理は、高位の王族、兵士、治安判事、政治家たちの手中にあった。時が経過して、フランスは兵士だけでなく、教師や演説者の国になったが、その一方で、創造的衝動は至る所で制御され、制限されたのである。軍隊や教会組織によって、堅く結ばれ、団結し、強固な繋がりを得ることで、ひとつの国家になったため、フランス人はたちまち連帯感という天性を手に入れた。その結果、個人は次第に矮小化し、ついには国家の単なる歯車と化してしまった。この連帯感が、個々の演繹的論理と結びついた結果、美しい思想を豊かに生み出すことになったのである。その思想は、荒れ模様の空にかかる虹や宣教師の衣服のように美しい。すべての人々の中で、フランス人が最も絵のように美しく魅力的であるのと同時に、最も雄弁で説得力がある。文学、人生、そして万事において、社会的で心を共にでき、伝道師的資質があるのがフランス人の特質である。

イングランド人はこのようなことでは万事において、正反対である。自由への情熱こそ持つものの、平等や同胞愛、或いはフランス知識人の誉れである理想にはどれも、気にもとめない。事実、イングランド人には思想を形成する能力が欠如しているため、自由に対する感情でさえ思想や教義になることはない。つまり、知的に思想を生み出すのではなく、すべては習慣によって身につくものに過ぎない。その中には、長い使用で、イングランド人の中で発達し、生理機能のほとんど一部と化し、血や骨の中に行きわたると、いつも傍らにいて用心深く不断の見守りをするものもある。

しかし、これはイングランドの人々のためだけにあるもので、万人のためのものではない。そのようなものは、イングランド人の哲学とは言えない。そのため、インドやアイルランドの場合のように、イングランド人は、他国を奪うのに、それを容易にするためまずその国から自由を奪うが、その時、良心に悩まされることはない。というのも、自由とはイングランド人の自由をいつも意味するからだ。彼らの自由には、無力なためにイングランドに抵抗できない国からは略奪してもよい、という権利が含まれている。私には、フランス人とは常に学生に似た存在であるようにみえる。学生のように、学業に精を出すか、学校をサボり、規則から逃れ教師に反抗するか、のどちらかである。一方、イングランド人は、言ってみれば、正式な教育を受けていない人、つまり学校や大学で学んだことがない人のようなものである。彼らには、学業に精を出す学生の魅力も、反抗的な学生の逸脱行為もない。最初に創造主の手から生み出された時の状態からほとんど変わっていない。

国家政府の兵役や税金を免除されること以外にも、イングランド人の歴史には、特筆すべき事実がまだある。イングランドへの平和的な移住は、戦いをともなう侵入と同じぐらい困難である。他国では、人口が疫病やペストで減少しても、食糧を求める外国人が殺到することで、すぐに回復した。ところが、イングランドでは、こんなことは起こりえなかった。人口が急に減少すると、一人あたりの食料はその分だけ増えることになる。なぜなら、島の外から食料を奪いにくる人間などいないからである。イングランドの人口は、中世を通じて少数のままだった。イングランド人は生来の陽気さや心の安らぎを備えている。それは、どうにか生きていれば暮らしは楽であり、食料も十分に暖かな服を身に纏うことができる境遇を喜ぶ歌からもわかる。かりに、死亡する人々がいればと、亡くなった人々には災難だが、自分にとっては好都合なのである。そのせいで今日に至るまで、

イングランド人は異常なまでに自分の健康に気を使う。フランス人とアイルランド人が死を怖れないことは、イングランド人にとって常に衝撃的な驚きであった。イングランド人が一生懸命働く必要は一度もなかったし、大きな戦いに直面することもなかった。ただ自分の健康に気をつけていればそれで良かった。

はるか昔、平穏で、労働も限られる反面、死者の数が多かった時代のことである。ジョンソン博士を苦しめたと言われる死への恐怖と共に、ありとあらゆる習慣と性質が、良くも悪くもイングランド人には身についた。過去百年で、それらは目立たなくなってきたものの、その行動様式は今も残っている。イングランド人は、今もなお、自己満足、自己分析、自己非難、自己高揚、という様々なやり方で、黙想に耽る。彼らがいつも話すのは、自分のことばかりであって、話題が自分のことでなくなると、無口になる。話題にならず、褒めも誹りも受けないことは、彼らには当惑するような経験なのである。彼らは自惚れの強い人々ではないが、自分の話題がないと居場所がなくなるだけなのである。アメリカ人は、増加する自分たちの富のことにかまけるあまり、彼らのことなど眼中にない。そのため、このニューヨークにいと、イングランド人は、物静かで寂しいのか、或いは短気で喧嘩っ早いのか、どちらか見分けがつかないほどだ。本国では、飽くことなき自己中心主義者と考えられているが、この地では、彼らはイングランド人のようではない。喜ぶ時は、自分に喜んでいるのであり、不快な時も、やはり自分に立腹しているのである。また、彼らは、隣人といて不機嫌になることがあるが、真に反目する相手は自分自身であるため、折り合いをつけるのはとても難しい。変化するのは、彼らの思想ではなく、気分なのである。フランス人は、意見が沸騰するなかで暮らすのが、それこそが彼らの環境なのだ——人と人との、声高に怒号を飛びかわせながら、演説し、身振り手振りで論争し合う。イングランド人社会では、内省によ

る沈黙、つまり、内省を重視する国民が持つ沈着さがいつも存在する。フランスでは、突拍子もないうえ、論理的な思考回路から逸脱したものであろうとも、新芸術の流派と文学における新たな運動を興すのは大きな功績と見なされる。イングランドでは、そのような運動は、受け入れられるかどうかは別にして、新しく登場したものに光をあてることであった。フランス印象主義は、熱の入った論争とともに世へ紹介された。ターナーの絵画は、不可解で、謎めいたところがあり、激しい気質を表現していたが、当初は話題になることがなく、その影響を受けた者は見当たらなかった。イングランド人は、衝撃を受けるとまるで心安らぐ自宅に籠もるように、自分の殻に閉じこもる。それに対して、フランス人は、おのれの世界から出て、友や思想の世界の中で周囲を取り込もうと運動を始める。フランス人は、人に感動を与えたがる。フランス文学や芸術は、劇的な驚きに満ちている。一方、イングランドの芸術や文学は、いつも驚くような手法を避けてきた。もし、芸術や文学が感銘を与えたとしても、意図的なものでなく、言わば、そびえ立つ山が谷間の人々に強い感銘を与えるのと同じことなのである。それらは、人の不可思議な深奥からいつも生じるものであり、作品中の情調だけに関するならば、その表現はリズムや調べをよりどころにしている。人はおのれを解明し、説明することはできない。せいぜい、冗長で空想的な音楽という芸術作品によって、心痛を癒し、怒りを和らげることくらいだ。フランスの芸術や文学は、思想との関連から、荘重な音楽より、むしろ芸術作品の強調、活気、格調高さを用いることで、思想がすばらしく整然とし道理に適っているようにみせた。その結果、フランスでは、さわだって優れた知性を待ち望む。一方、イングランドでは、人々は力強く、不可思議であるが、親しみやすい個人を待ち望む。その表現は、意識の深奥を探る人にだけ理解できるものなのである。フランスには庭園が、イングランドには荒野が見いだされる。しかし、庭師は、新しい植物

や低木を捜しに、荒野をよく訪れることを忘れてはならない。帰納的精神が撒く種は、演繹的精神が移植し水をやる植物の種なのである。

自分本位の人は、飽き飽きするほどおしゃべりで、常に自分のことについて話すもの、と広く考えられている。こんな人間がイングランドにはあふれている。彼らは、習慣的にも本能的にも、おのれの好き嫌いが真理をみる唯一の基準になるものだと考えている。そのため、幼稚でおめでたいところがある時には、人は嫌になるほど多弁になる。彼らの中には、チャールズ・ラム²⁾のように楽しい、ユーモアを解する人物もいれば、彼の騒々しい兄ジョン³⁾のように、そうでない人物もいる。実際、彼らの中には、うんざりさせる人間、変わった人間、流行かぶれの人、そして自分のことしか関心がない、数え切れないほどの人たちも含めて、あらゆる種類の人間が存在する。加えて、また、シェイクスピア派、ターナー派、ホガース派、コンスタブル派など詩や芸術の思想における偉大な先駆者と先人がいる。

自分本位な人は、欠点を補って余りある素晴らしい魅力がなければ、社会的には失格であろう。人と溶け込もうとせず、いかなる時も仲間と交わることができず、付き合い難い人である。そんな人を尊重すべきなのか、完全に縁を切るべきなのか、判断の難しいところだ。晩餐会でも、イングランド人は、そんな誤解から不当な扱いを受けることがある。そして、後になってからその言い訳を聞かされるはめになるのだ。恋人たちは、いつも一緒にいてこそ楽しいものだ。これは諺に言われることだが、イングランド人の場合も、恋人たちのようなものだ。もっとも、恋の相手は自分自身なのだが。かたや、歓迎される客——社交的な人——は、自分以外の人に恋をしている。そのことは、社交という些細な問題だけでなく、もっと重大なことにも当てはまる。

グラッドストーン⁴⁾は、イングランドに住むスコットランド人として、慧

眼の持ち主であった。その彼が、イングランド人にはかなりの規律が必要である、と書いたことがあったが、それは真実である。その構成員がお互いの意見に従おうとしない社会では、明確な規則を定め、一定の刑罰を課し、その規則を守らせる必要がある。かたや、フランス人は、作法を仕込まれたうえ持ち前の社交能力によって、「身の処し方」を知っている。規則を記憶する必要はない。彼らは直感的に知っているからだ。この内なる光がない場合には、当然の如く、理性、偉大な社交的精神、親しい権威ある者、そしてその前では万人が平等となる賢明な判事に頼るのである。イングランド人の自己中心主義者には、このような持ち前の社交能力がない。彼らは、進んで、理性に訴えることもない。近頃のイングランド人には、社交的でもなければ合理的でもない階級意識が深くしみ込むようになった。イングランド人がいつも回帰する本能には、自らの優劣という意識でなく、自らが異なっているという意識がある。階級には属さず、一般規則も適用されないユーモリストのような存在を考えるのだ。そのような人は、万人が平等となる裁判所に簡単に訴えることなどない。

フランス人は紳士である。優れた才能、教育、知性を備えている。イングランド人は、これらに欠けるため、賞罰という手間のかかる方法で、教え込む必要がある。鞭に打たれて教育され、理性ある人間というより、よく訓練された動物のような存在となる。だが、——そのようなものは、たんなる習性のもたらす恵みなのであるが——イングランド人は、嫌々ながら身につけたことを、最後には喜んでするようになる。法を遵守すること、つまり、厳しい規則によって、違反が禁じられるうえに、杓子定規に違反が解釈されるのは、イングランド人にとっては、逆に喜びであり、常に思考の対象となるのである。規則が厳重であるため、気分的にとっても重苦しく感じられるが、そうなのである。それは、規則というものが制限するものであったとしても、同時に、個人の自由の範囲を定め、確保するも

のだからである。イングランド人にとって、規則とは、思想の代わりになるものである。人々の熱意をかき立てることもなく、中には明らかに不適当なものもあるにもかかわらず、規則に従うことを喜んで自分の義務とする。法の及ばぬところでは、イングランド人は、扱い難く、傲慢になりがちで、隣人と口論し、骨をくわえた犬のように、自分の権利を失うまいと用心し、疑い深くなっている。だからといって、イングランド人が不幸というわけではない。どんな時でも自己満足しているという点で幸福である。実際、自己陶醉している自分本位の人間は、自分が座を白けさせる。常に邪魔者で、ネクラな人間だと、自覚することで、一種の喜びを味わうのである。そのことで、興奮することはないが、彼の支配意識を楽しませる。不思議に思えるかもしれないが、彼の嫌悪感をも楽しませる。いずれにせよ、私は、このような人間に、イングランド内外で会ったことがある。しかし、このイメージには別の側面がある。このような、人と打ち解けない自分本位の人間は、優れた学校教育を受け、振る舞い方を学び、グラッドストーンが強く求めた規律を身につければ、最もすばらしい話をするようになる。なぜなら、その話は、全世界を分裂させる論理からではなく、全世界を親族にさせる、内なる個性から湧き出てくるのだから。その会話には、ほとんどいつも親密さと打ち解けた態度を感じる。聞き上手で、相手を否定し論破しようとはしない。それは、二つの考えがあると思っていたが、実はひとつしか見つけることができなかったと残念がるような話しぶりである。教養あるイングランド人たちが共に話すとき、その様子は、夏の長い夜の間に、森の中で腰を下ろし、静寂の中に近くの小川や枝を吹き抜ける風が生み出す音、或いはナイチンゲールの鳴き声に耳を傾けるのに似ている。人はいつもこのように話すべきである。騒々しく、自信過剰の議論は、せっかくの知性を台無しにする原因となる。

自らの性質から、自分本位の人間は二つの価値ある特質を手に入れる。

まずひとつ目に、自己管理の方法を学ぶ。もちろん、これは、高度で難しい克己という術と同一ではないが、人生から最良のものを手に入れ、最悪のものを排除する方法について知ることは重要である。たとえ、人生そのものが、平凡かつ無味乾燥で、或いは、不道德かつ放埒なものであろうとも、そう言える。穏やかで巧みな自己管理は、イングランド人が成し遂げた優れた功績である。もうひとつの特質はさらに重要なものとなる。自分本位な人間は、普通の女性が求める基準で言えば、夫として最高の存在となる。その夫は、まさしく、伴侶という言葉で言い表せるだろう。現状では、仕事に関することでは、妻は夫の十分な相談相手となることができない。夫が信頼する事務員にも敵わないのである。しかし、夫婦には一種の友情、仲間意識のようなものが在り、妻はそれを必要なだけふんだんに与えることができる。夫が自分のことを話す時などがそうである。他人が入室を拒まれても、妻なら入れる部屋がある。そこで、夫は、妻に自分の苦しみ、痛み、悩みについて話す。膝やひじの痛み、或いは、頭や背中のかかす痛みがあること、咳で困っていることなど、さらに、過去の咳とどう違うか、或る人の咳と怖いほど似ていることなどについて。これらのことが、数えきれない傷の痛みと誇張された自己愛とを交えて、語られるのだ。このように飽き飽きする事細かな愚痴は、たいがい重要なことでなく、妻以外の者なら耳を貸そうとはしないことばかりである。だが、「心優しい妻」は、注意深く、理解力があり、そのまま真に受けて聞いてくれるのである。それは妻の義務である。もしくは、そう思っている。知性が高ければ高いほど、すぐ信じてくれる。自分のことなど語るもうんざりだという夫と結婚した女性は、もちろん幸福な妻であるが、女性の満足度が最大で、最も幸福なのは、自分本位の夫と結婚した妻なのである。花の中にいるハチのように、妻の姿は、妻としての深い愛情の中に隠れて、ほとんど見えない。夫は、自分の世界の中で、自らのために生きること

幸福を見出すが、妻は、自分の世界から出て、夫の世界の中で生きること
に幸福を見出す。妻と夫の両方が満足している。これが、私が観察してき
た、イングランドの夫婦生活である。この完成の域に達した姿に、人間の
成長における二つの方法が並び立つのを見るのである。

原題：“Why the Englishman is Happy: An Irishman’s Notes on the Saxon
Temperament”

利用したテキストは以下のものである。

Yeats, John Butler. *Essays: Irish and American*. Dublin and London: The
Talbot Press Ltd., 1918.

注

- 1) Jean Froissart (1337-1410): フランスの年代記作家、詩人。1360年イング
ランドに渡る。8年の滞在後、ヨーロッパ大陸を旅行。その後、引退し、オ
ランダで14世紀のヨーロッパ史を扱った『フロワサールの年代記』を著した。
- 2) Charles Lamb (1775-1834): イングランドの随筆家、批評家、Elisa の筆名
で知られる。
- 3) John Lamb (1763-1821): 父親は有名な法廷弁護士サミュエル・ソルトに
仕えたが、ソルトの死後、一家には不運が訪れる。兄ジョンは家を出て行き、
姉メアリは精神を病んだ。
- 4) William Ewart Gladstone (1809-1898): デイズレーリと共にヴィクトリア
朝を代表する政治家。自由党党首。第3次選挙法の改正、アイルランド自治
など多くの内政問題を手がけた。